四郡地名録 上

島郡
磨郡

内閣文庫
番號 和 23775
冊數 3（1）
函號 174 19

19
内閣文庫
和書 類 二三七七五 號
三 冊
一五四 函
四 架
（一ヵ）

国立公文書館
National Archives of Japan

四神地名録

此多摩川ちかしを初しらかく流るゝ紀芽ある武蔵國
御代ゟ河しるきまでも御代に四国の河浪あり日をかさね
幾世かりいえ世にある事経し御ぬ手習ひなきて遠
きつ玉郷も四方しても長地久にして古屋し万代かけて
うつれあきし四神の地名しけふむかしかし御墨わ
あきし玉川の流りさまより多摩川の流ま筏
揃り四神地名録と題し描き筆記をなし
伝りも描く学びつるれ侭りをあきの難歎かれつ
ん事をおそれまことし御しても後くこのあらし

于時寛政六ツのとし夏六月

明治十三年購求

黄薇山人古松軒辰道誌

日本惣國風土記第八拾四 古名旧地ヲ擧タメニ抜書ス故ニ全カラス

武蔵國豊嶋郡上

名浦 二ヶ所 園 二ヶ所 河 二 池 二ヶ所 泉 三十ヶ所

宮祠 九ヶ所 寺院 七ヶ所 墳墓 六基

豊嶋郡 武祇嶋東限下谷邑西限箕田南限藍田川北限向國

古方武浦方 古方神社

六年戊申六月 瑞歯別天皇御宇

新羅大樹之神也

随所寺 慶雲二年丙午依不法處し頗ゆるし

日頸

白鳥神社

白雉二年辛亥五月新羅日本武尊也

徳業院　白鳳二年甲戌か僧始義也

江戸寺荘古

江戸神社　大宝二年壬寅下野東あ画鳴ゐや

吉如院　和銅元年戊申九月我開基之地也

荒世陵　小泊瀬稚鷦鷯天　庚辰二月野見我臣有復死

于道

湯浴

湯岡神社雄　天皇御宇二年癸丑八月自宮新祭

下手力雄神也

神田　韓田

下谷　園

篠鵜津池

荒墓郷

荒墓神社　大化二年丙午新祭猿田彦也

廣園

箕田

箕田八幡神社

天平六年辛未八月十五日自宇佐宮

遷御于茲

角筈村

六所山長楽寺と号せる新義の真言宗なり

大猷院様府中六所明神へ詣でさせ給ひ

還御のみぎり此寺へ立よらせ給ひしとぞ それより

六所山と称させられし此寺に

大猷院様の御手跡とて古紙横文の掛地一幅寺宝

とし珍蔵是を深秘しぬ

其文に

文備の事ハ知らざれども いさゝかしれ
御文章にて
御武將たる君の御てがら いふもさらなり かゝるてきの掛との
ことばを目のあたりにみちみち申すのみ ひもおち
かたくし かたきはありける事なかりし
御氣象周の武王にも劣らず備りしと感伏しくく
誰もしも申あへりし

以一張弓勢
定天下
以三尺劔光
安國土

角筈村十二所権現大畧圖

傳へ曰昔時紀州より鈴木九郎何かしといへる浪士来りて中野の
今の住たる所（にて此地は中野なりし）に地をひらきて熊野十二社権現をおのか宗とて
勧請して後富裕倍あまたつもりたりしによりやありけん家
繁栄して今の誉を得て世人中野長者と称せしとか
性質吝にして金銀をかくさん事を欲し奴僕をして
ひそかに彼金銀を負はしめて其辺の山林人跡まれなる所
原野をゆかりて埋ミ隠し事終て彼奴僕人に
告知らさん事を忌ミて帰路にて殺し又は必日を暮し
橋のもとにて切殺して水に流す事数人に及ふ此故に大俗
姿不見の橋と称し後に此橋をいふとも奴僕橋を負て
行ハつれともかへる姿を見すと（正保年中の此と云傳ふ）いふの此名やありけん
大君御放鷹の御なりの時聞召給ひ還御の後もちゐたまへり
事終ふ上此名いまハ姿見すの名よろしからすとして淀橋と

称しハしし泊命あり此所を今は淀橋といふと也長者其後悪報身に迫りて
去人の女子蛇身の姿をあらはし故に長者大に悲しみ泰叟禅師を招請して
正観寺の女の血脈を受させ經文数巻池に投せしかは此女忽ち仏
果を得て昇天せり家をおもく長者一念発起して剃髪して正観と
法名し今の所を捨て今の玉郎あまた成願山成願寺を建立しぬ（十二社権現の別当なり）
別当の住居せし宅地としと云傳ふ（其より玉郎の名ありと記し）

上石神村

亀頂山三宝寺新義真言宗にて後入標木を建つる所は字中拾石
往古は此所に三宝寺と号し燈明寺と號し此村は小田原北條氏康
氏政の書簡など今に住持の所蔵とし今もいふてん世にいふ也

同村

三宝寺池と称せる池凡そ半町はかりの三宝寺境内にある三宝寺の地なり此池は
井の頭の池よりも小さし池の水は清し旱魃にも水少しも減せぬといふ

弁天
池の東西六十余間
南北十間余狭き所ハ
四間東へ流る凡六七十間
豊嶋氏の
古城跡今ハ
畑となる
氷川明神
三宝寺

流の村と用水として益は池あり魚多く鮒鯉も多く中にも
卯月の頃よりハ大蛇菜といへり大蛇ハ芋生の茎よりハ二三尺ほど
まて味ひ佳なり青みて凡そ黄緑なり其色ハ井の頃く
平田井村の苔池を池中に三四寸も池の脈通して關村
太古田村の清水も多く湧ありんかハ何よりも多く満々としてあり
旱魃にも減る事なし且井の頃の池にも此三四寸も池といふ中に
島を浮かべ有て底知れさる頃いふ松生えし島の庵し
此ハ形和龍に似て深く水すみたるのみ大人池といふ称なれ
とも堤なし自然と池底にて水の涌出なれは
小さき池も有といへし此池つきに古城跡あり其傍らに
何かしといひし人の古城なりしに古田氏の為に討たれ
まて家臣でのらといふ此古城跡今の内年にして知らぬ少
伝へ池の常なるハ沼田中の大きなる城跡なり

ありくは今也地にてもりを取とし有るとぞ所々に櫓あとも
遠し所々見へて筑山の小山もあり古城氏みとし人や詳
ならす

同村

此所ハ新羅郡豊島郡多磨郡の界として大ひなる村なり
云傳へしは古ハ京より奥州への街道にて関のありし所とて
関村と称し来りしと云未詳ならす

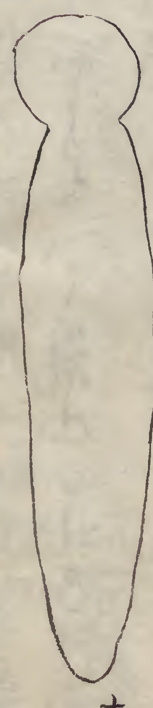
同村

水の涌出二百余の池あり所々にありや生じて池ともいへる
古へより其の水の事ハたひし正月入桜の花見てから下の
村と水積もる其川も有て所にて水を絶せる
ふる陰といへしさて三年以前此池の内にありし魚なと多く
かく怪しき事ありして出ることありて一年に二つと夜程

ありし数日の事にて定かならねバしかして夜の九つころより石ハ
事あれ共その書をみれバ後にハ騒動せし人ありて大勢にて
彼石を掘てあらためしにて一尺余其以下何ハあらバ
掘出しけれバ大きなる龍出て去りしと云何ぞ
いふも知れぬ故人の云葛切ともいふ事ありしされど古く
より葛切と称せる大なる事怪しけれバ虚説ならバ
知るべし

下石神井村 此所ハ上石神井より村ちかし

此村に石神の神社と云あり僅なる小社なれど神体ハ石にて
神代より以前の石剣なりと云ふ事の如し



石剣の長サ二尺余丸サ太キ所ニテ一尺余色ウス
青ク質至テカタク重キ事鉄ノ如シ

世に云日本の開闢ハ天神七代をはじめとし夫より以前をもて
人なき世ハ何ともしれずその后應信宋帳之なとのごとく仁義五常
といふ事を知りし人も禽獣のごとくなりし故か皆たちのなる
勇智ありて強き者は海内の賊をしたがへ剱力の強きハ其下なれ
なり遂に後素戔嗚尊のごとき山田の大蛇をも退治ありて神代の
村雲の剣を得給ひしかバそれより其まま其の闘争の具とせ
木石を以て製せし事のまた其の世に至りてたしかなるものには
ちかひまたあるひハ風俗ありて曲玉の類ありしを神代のものし業
しけるべし宮に置きたる物と神代以前の石剣ならまくまれ
なりまことは此のまて天下の珍器といふべし僕近江の石塔寺の弥
勒もろもろをつくり出したるを見しかバ古人の伝ふ井を掘りし時
地中より出しかバ村名を石神井村と称せるも古く
よりのことなるべしそれにて故ありし事なるべし事共にて皆言いぬ

菅原村

菅原山妙楽院長命寺と称ハ昔此なりし古人来三郎坐も
いつ遠国ゟ来り此村ニ坊僧来て云ひしハ弘法を祭り
紀州高野山ニ登りて東之受本命の僧也、弘法大師
の真影を蒙りて是仏とゆて云ふし高野山を建立ハ古大
師なりし古院あり縁起ニハさ淘くの菅相侍のふ名寄を記
せり仏家の虚言ハ皆かくさらハ車して気にいつわし

中村

瑠璃光山南蔵院医王寺古宗にくまきちあり
御朱印十二石八斗余也緑もゆへんし住僧ニ対面し開山当
と云ふへしニまきつ鐘よりの経蔵それ何もわかれしと云ふから
いかなる家の世ニさまさまも世の流れしいつわし

柏木村

医光山円照寺といふ寺ありて其古ハ薬師の是仏にて
醍醐帝の御宇筑波の貞盛仏像の安置せし平将門か叛
逆あり逆威を振ふの時藤原の秀郷是を亡さん事を謀るに
わかに病に罹りて此薬師に祈りてしに病忽に
平愈せり秀郷大によろこひ将門を亡して終に将門
誅せり凱陣の後此地に大伽藍を建立してねんころに崇せる
ところの甲冑を此所に納むるよろひ後ハ兜の森と称せる
地に小社を建て鎧大明神と号し兜を埋しいふ地も今存し
の松なりし其の大木年古り枯し松をうへくへ樹しそれより後
あれはてて衰廃せしに建仁年中の頃江戸氏重修補せしと云
人有興せりしよりもまた中村将監合戦の時兵火にかゝりしそれより
鐵にあて猿の為に焼失せしにのこれ跡僅に旧跡あり
其後菅沼なりし如く越後の景虎小田原北条家と合戦に

及ひ時至りかへりてことく田原して既に絶んとせし故此要
官女春日のつかさ称官職をそへて今のちくに流連之事しく
ことし
宝物に筋兜一ッ秀郷寺に伝しところあまた有り兜并
から伝しのこし
此中より宝物を出しかつら称の観音法長七八寸ばかり珠持
ちくゆりね一寸厨子の本像法長四寸ばかり荒木作りにて
ちくえん色般若と同しく寄せしまいらせの作具あり是は
古代よりのまゝ大切なるものぞ尖の根に本文蛇のひし棒させ
其の下中堂村宝仙寺にあり蛇のひとりもちひしてかたちは
同郷の人ありお伝えていふのこそ中身あし何のひかや
ゐる家にて世にうきも怪しとふへし弘法大師護摩の灰
にて作りありしといふ古き物ぞこれ先頃にいくらかしゝ動る

先頃は法然のりいかかことのまゝや庭に古来の桜と称せる桜一本
ありける古き昔時京都の人は右近の桜と称せしと云ひ官人いろの
罪にてや此所へ流されし中堂寺にうつりし人の植置し桜にて右近の
桜ともし称し名高し風流にて植つきし桜といふ事なる
画像あり是ハ後世に画し其のかや中納言の筆に画きて
ありと古老の伝には不合せし画像といふ

同所

護大明神と号せし小社あり秀郷甲冑を祀りて兜松と
いふ古木の松あり何の事もなく此き所には神霊ありて甲冑を
納めしといふ昔は秀郷の代のもの今は[illegible]かく所は林
日吉の本像ありて是は絶へとも有る余法を入る人数多[illegible]
くしといふハ世の流行にや森深く神さひ幽雅の地
あり

同村

此村に査古坐といふ百姓ありて貧しからぬ僕あり小太郎の何某
か若かりしハ小田原北条家に仕へし何某何かしと云し武士の
流にて古き鎧兜きこみ綸長刀を所持せり其の後の武
器にて持捨かへしの内ハ切きちきましくありて
あり兜弐ツの内一ツハ先祖のいはれを以て奇麗かしら兜まて
ところハありてちちきかりの兜あり其の一ツハ今に伝り
所ニそこなひし小ありの兜あまハ頭巾時代の姿なりしん
僕が目利にて知れ其村に伝へしとて北条家よりの古文書

定　之事にて

一 於当所ニ撰候凡下自分依用之御下之住居撰者
ここ名をの記事

一 道具ニ鉄炮之根内何数

一 まそも木柄のそれも二尺より短ハ此用に並ふも弓持つへし皮ふ

投陣役士武高人成細工人ハ歳十五七十迄切りて記事

一 腰さし数之をして武士めく出す事の支度の事

一 ふれ出を撰ひし支用前にも中付おりて当年の小代官何時も

出お小少て可切頒事

一 走り迎ひても公儀より出候共ハ侍にても凡下にても随分可有出無

賞事

右自然之時も御用之八月晦日を限り而右諸色具可被支度

今年請負之分ハ交名以下をハ来月廿日ニ侍可指出ろ

如件

子亥七月晦日
柏木角左

小代官

百姓中

来年本のさくちひあり角判して中の紋文字なとも尽くひ

何も知りん并方まちらせしまのまてわそんはらるめりひ浅度

の栖石当代よあきし名目之ほか解しかさき文書之僅二百余年

以前の事さへもその世まて考へてハいうの語も知きこし

手跡もまれなるし古雅あり文段ニ家ニ字の書写あへ

露ニ残せて以之も讃岐誰長刀まそも貴押さうかハ流石

武士の子孫ハいやしく武家ニ出まて武家をうりまくらひ

質の在るも有り歯黒き世の中あり

下ミ田村

神霊山今宗院にいつきまゆ先守今の由緒ありとて大般若

本花開耶姫之大文字小枕をセし春月簗ろ丘そこうん

事ありし

下落合村

ふしの稲荷と称せる小社ありけり眺望ありて佳し
うしろハ一面の田小高き岳にて東よりつゝきて小山な
る西北ハ狐の穴有て平生に狐すミて人をおそ
れさ里人ハ稲荷のきつねとて犬のおふさるゆへに
垣ゆひしを結ひて敬せる事也

同村

福勝山業王院といふ寺あり此所の修行し釈迦如来あり摂州誉織の釈迦仏と同木同作にして日本二仏の釈迦如来にて異様ありて何催の[?]ありし

鶏冠井村

此邊すくして上世の巣野の所とよりし志らし古書よつれはきし云傳ふのことも詳ならは鬼子母神の堂は人の知る所にして法華の寺あり東傳ふ昔時此所に柳下はうしと云し百姓耕作せし地中より掘出せし洞仏にて何仏とも称しけるに古佛なりて東陽寺といふ寺に遷す 今の大門寺也 此寺は縁起あり

鬼子母神を土中より掘出しは山本氏の百姓と伝り 此所のもとより此村柳下氏のちなみあり是にて遠くは有し山本氏として縁起をしるしあるは虚説なりといふ

かくハ旅のつかれをいひさし事長く書に略しぬ
是永禄四年の事とかや東陽坊方丈より安置の御像の出しまいらせ
仏前にちかきその古仏ていかにも雅なりけれは霊場にをさめとりて堂
一宇建立して我ハ鬼子母神の霊なりとて彼僧に告りとうつきて
みつから示現あり当寺の本尊にさためて我ハ雑司ヶ谷に止りて寺を
建立せんと示す所に海抜所の雅なりけるとひて寺をたてし
あひ風流の草をおほしかぬ事共のかたをのこすとかや参詣の諸人
詣りしたひて雑司ヶ谷東陽坊に造りかへにしへしさもありかは渡を
其すゑ毅きんとて移りかりし桂氷のおかくあらしけん旅人の来りて
いはれきけ雑司ヶ谷へ送りせし其実にて鬼子母神の像ありけれ
け宗門の流有信せられわひきまいらせその堂の地を橋前所の御
小社あるにしを建ひそて一宇建て鬼子母神の尊像を立てより世太鼓
筆まかせしにこうて宗門のもとり初度めにて来清記しきも

されは法華宗のそのハ建こもえて群集せしによりて東陽坊も
稲地にありて大行院と改名してそのまへに鬼子母神をあかめて
しそ建立せしよりの里人も参りく群集して椎をおりの時は仏のかち
おさんて火をともし作りぬとかりハ坊もあきし中りに賑ハしくし
巧をそハありつてしくう
大行院代猶僧にもしいけるハ一乗院の代前田利常の御臣加賀の中納言殿御側室の
本国慈照院殿へ入るも自昌院と申せし此方の本建立有りしとき
よりしけちに女房なりて小情部主情の末係あり当寺の代三部
系譜と御道部本三宝部本称して名高し人に清好ちとう所ハ大行院の本さ
そ末なるへし古跡所とも呼へハ

上板橋村

武士山安楽院と云寺の地に西明寺殿時頼の建立の地といふ伝ふ
むかしハ宝搭も多かりしに兵火よりて焼亡せしと云ふ

是ゆへにや西明寺と称せるなるへし

何故に最を西と訛りしや可考

下練馬村

此所に今愛染院満徳寺といふ地にて御朱印拾九石九斗余
宝梅院と云御朱印も所蔵せる事ハ其始而傳もなく
本寺なきとも何世の寺ぞとも知らさる事ハ不思議とも
いふへし

同村

此村中に小川流し原の畔あり是をも乗此ハ廬役にて
其頃ハ入る船久米川よりかよりしなんと云へり

上練馬村

練月山愛染院詰寺なる真言宗にて御朱印拾弐石なり又
八幡宮の社領ハ石米と愛染院別当なるより都合拾弐石の
御朱印地にしかる愛染院ハ主にて運営の作佛とそ

観音ハ春日といひし弘法師の作なり宝塔ハ焼亡して一宇も
なし此寺の大宮ハ左との事の由古人もあへて揃ひ事にて焼亡し
作り出る事も廃亡なし

上練馬村

古人蝋山とも矢の山とも云
練馬名所道を云し人への
古蝋燭なり此代詳かならは
三年代にて頂までみて
もくらく蝋燭形
より石神川に流出
左右ハ深田にて要害とも
思し蝋とハ称し給ひしより
要害しけむかの御要
とせしといふへし

練馬村といふハ上下ありてハ高弐百余石此所ハ高きものも広大にて
東西三里余南北ハ一里或ハ一里三十町の所もありされとも畑作ハ
みちて田方ハなきゆへ土風土すくなきハ広きところの土地大根
を作りて上品とハ僕按するに世に尾張大根を称誉しぬれとも大根
ハこの土こそ味ひ甚美佳なれハ此地の大根ハ味ひ殊によし且たひたひ
大根とおのおのハ日本第一といふへしさて此村名を練馬といふ事ハ西儀
詳ならぬハ古人のいふによれハむかし此辺ハ武蔵野のうちにて
第一草木生茂りて住む人もなく只牛馬あらし放篠ありしところ須賀
の原といふ所より宮をたて住居を造りて住居し其所の牧場
ふりてあるを盗賊集るを業とせしもの余討てよ
させしの入る事あるによせるふ所ありて安倍の住居
其の條の所に留り當所の辺を見て鬨気を成るを高ふす
を職となし其所に勇士もありしとの事そろろ土地をひらき

而その流ハ風呂の水を寄集め一村の用水となり今も其名を称へ
ありて此地の庄官しむかしの言ひふるの辞を知をいふを称へ
とらひしより古き名を解をは右の人の伝ふるを伝ふ覚へよ
古の名田ハ殺生の事を堅く禁じけるを破りしより此辺
まハしくるの辞を恵とし其事によりていつとなく称ふるを
以て村名とせり此一件ちかしく此人伝ふるし里人の相伝を
宣よ志るせるのみ

西臺村

西臺山圓福寺は曹洞派禅宗にて朱印二十石御よりふもちま
中作何も何もふ有りの宝物古例の嫁夫

徳丸村

安楽寺といふは除地弐拾石何の故にありて多年除地なり
知らし

豊島下

まくて此辺の村々ハ荒川にそひし田畑広大にして武蔵の
うちかゆしふんは百姓の元住まふる霞をとたからしぬ田をふるを
くきてと云 前云ふかく おそくきていふハ田端に出を酒を云 何の事やらんときゝしに
なるの腕ハ鵜の肥しに鶏を集めこれのふしての満りて田端へハ
鷹鴨殺さつきての辺によるの腕に癖に出りて鵜作に称
肥を入れてよく生まるゝこのよし 僕七十にわたりて始て聞
事し織しきるよあらふも百姓ハ其の中にらくハ知らさるにハ
志りけらんとあるし気なふし

武蔵国豊島郡之記 下

下赤塚村

古記壙なり無義ニ赤塚之古き額をのせたり故もなく
んと里人ニ由来を尋しに詳ならぬ遠鄙なる所ニ千年
跡を失ひしものおほし古き村ニハ古き所もそこに無う
佛ニ雅なる神像の跡へ古き手ニ大概をしるしおけり

土人城山ト云千葉家ノ古城跡
ニテ圖ノ如クカラ堀ノ形クルクトアリ
時代詳ナラス今ハ御林トナリ一町
九反アリト云トモ廣シ山ノ形ト云ノミ
ニシテ岳ナリ頂ニ畑アリ

名つきて田植ひと称ひし世の祭式にして甚もちきゝ神事なれ
ども古風とうしなはして年も執りなし正月十三日程大
皆十羽刹の杜に揃ひて例当る若禰宜を頭りて
耕作の式を神に餅をかさくつゝ米三斗余を餅を以て
農具なり鍬鋤るの勤うしの鞍耕耘の具は穀果こしらへ
柄ノアル具二ハ二八トコト云
木ヲ以テ製ス
でくを調しうへそみなく立ちなかり
ノシ乎をうきを帯そふてえひて苗代こしらへの志ひを牛と
云ひし人は板面をかぶらせ鞍をうけ縄をつきてまへを追せ
鞦 鞦を以て尻をたゝき田均ありきなしきて中を引まはし丈
まうい人の鍬をつらし称をうけの餅の鍬をかつき尻をるゝ
うしきそ田作るそいを以て田事小麦して農業の次第下りも
始ひうくうりん把しを入るとうなり興なる事のどしし秋
小ちりしはるみなくこと笑ひとして老年てゴザル えそうしみ

懐孕メテタヤく〔ヨナンゾウ〕〔イナンゾウ〕催かでヤレヤーとしるよし此時よ
老人の姿にこしらへ村まで来りしに百姓ヨナンゾウイナンゾウといふ
アりて席にいそつ目出たいく五万町九万町ナンノウしこノノ
ラヒラタテ〔ヤス女〕〔ヤス女〕は太郎次稲かりの上手太郎次太郎次はなかくしこ
ヤス女は婦人の面を〔太郎次〕は猿田彦の面をかへりつ太夫
太郎次は獅子をまねたりし右二つの面は作の面といふもの歳百年伝
へし面にや鼻も口もなきし古面にヤス女太郎次飛んできたりと称
たりまこと藝をし其後に〔ヨ子ボウ〕と称しまた人形をして婦
人の姿を作りて無病をまもこせヱヒヤくといふて今年酒を持
出来るにしそれをみなくとり給ひ春一踊りおわるんとて
ここに立ありて百姓踊りをし石風の如くかくして終ゑ稿子
まで相済みけのち又儀をとひ神酒をいたゞき安穏の
祥をして祝のくらしかいみをうちてよろこびつかこし此時は人の

獣ごり大年をむかへけヤウし大かたきよう易きか集ひいて
やしこらなくかて稲まろカセロトなくは稲を荊ぬる者似とし
五万町九万町の稲を一万町は請なくまでも去年の稲は茂
まつくやるの稲は庭につかねつゝ神るの飯とくらへは里
人の稲作よしとて蝿もあきし古式の中にて今の世何人かかる
至る麻らしき事をかんや自然と仕来りし古人の神ふるを
僻地の民にてはよこしき法式を失ひして概りよることし此俗よかる
百姓は何事のむかしの歴くにて旧の規操とは儀式よ上古かる
神宮の有しとき五万町九万町の内を一万町とは請るく
余りもんとをみなは放出くし日本にては古しへは淡製なる
前し井田の法て法儀おのく出来し田累を多く領せるを
大名と称し是くなきを小名といふようわかりし称有あり
井田しいふは

私田	私田	私田
私田	公田	私田
私田	私田	私田

一村一郡一国までも此割を以て一中の一田を公
田とし其外八田を百姓の私田となして　いハ
公田ハ僅にして私田多かりしてそのうへ
又其上ハ地もあまたありしかれども上世の百姓
と称せしハ今の世よりも百姓といふハ其地によ出来して上を
今地とし其下に耕し草をうる也の方て耕作農業をし丈の
割を以て出来の地に納め物を出してかの世後とて今の世を
以て古よりの百姓収飲百姓是也此田租の法有て九百町の地を一
百町程づゝさしけんといふ云ハ井田の法より云ふ事なり
かふん文武天皇の御時諸州国石高石を割のふ時に凡
日本の高二千二百万石とハ端くまての事にハ有也し古く
のなりし法とすべき古事もなく伝への事にてこの信ハ
かふ其後よりの幾百年山林沼沢平地を開発して殺

万石計へふへ其余万もふへんの井田の制を考へ其上ハ
今封縣にして郡県の制よりも猶きし戸はぬ　あるべき
御代に係くべき事や

同村

大営といへる釋迦堂あり古人の云ひ伝へハ大同年中の建立
にて古しくハ七堂の伽藍地有りししかし今もあまた下に其跡
いふ跡名堂前後にあり古しへ寺下町の有りし所なと云此所に古
き礎あまた残る

武之豊郡。州之重鎮。崇崇福山。
褒我彦俊。皀氏范鏞。以落以暴。
大扣大鳴。鯨吼霆震。啓昏迪迷。
遐迩感進。劫石有消。洪音無盡。

暦應三年庚辰四月初八日筆執三位親慶

大工平次五郎行次

勧進沙門治部阿闍梨快賢

暦應三年ハ今年寛政六年迄凡四百五十四年古き鐘といふへし
かく破てありしハ其地の事ときく故に音ハ他方の事に鐘を
鐘の形ハ図のごとく細工ありけり 龍頭の爪甚だ長く少しも損なく
仏像少しも長く寄異なる文にて唐福寺にて福寺東の
鐘としく彫刻してあり

長サ凡五尺
サシワタシ
二尺二寸

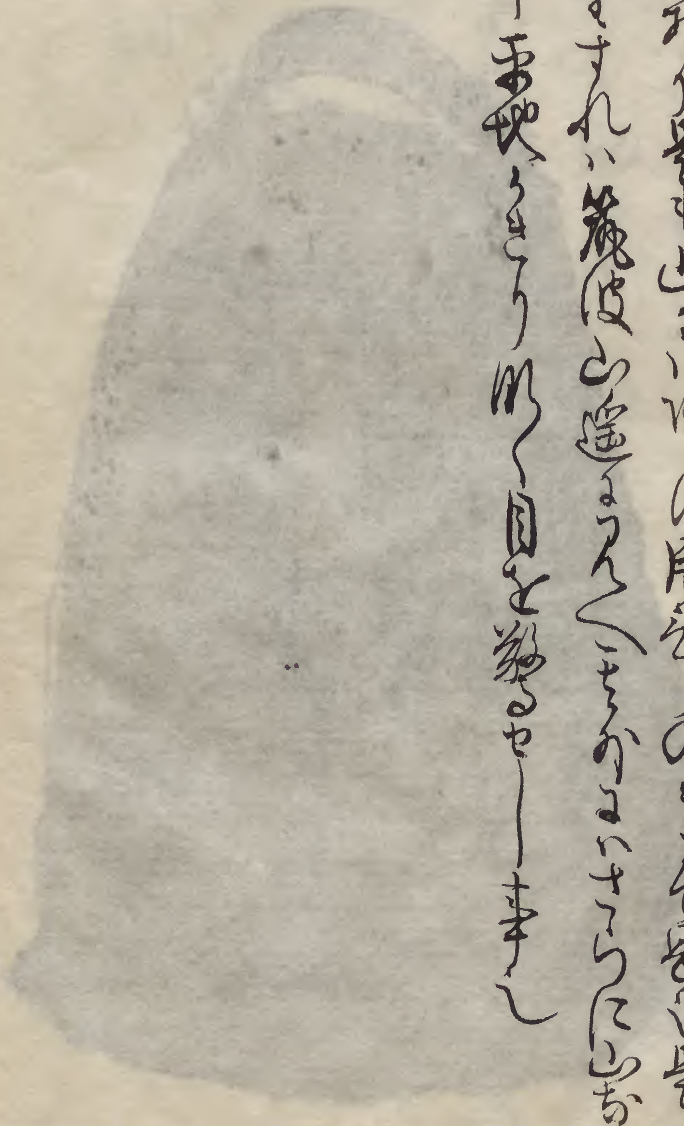
同村

百吉山松月院曹洞派の禅院本尊釈迦也仏ハ清来中四拾
石境内一万五千坪除地とそ古き記しあり伽ハ元亀建立
とも有ハ松月院殿前刑部大輔千葉氏胤貞其永正三
庚寅年六月十日と記せし古墓あり外にも建あるへしと云

古くハ西墓二ツ有貞秀ありし以前の墓ありし仮偏文尋しに
詳ならは林中ニ文明の年号有古墓もありし古き古墳
いくつしきらし開山ハ墨蹟紀而そ焼して遠りぬ偏平て
是より以前ハ知れす

同村

開戸山と云は林あり是も山とはいはす片宿ふのかく不置し是より
此東の方を眺望すれハ筑波山遥にうらうらと見へゑるはいさゝらに山高く
印ろくゝとそし雲秋をきり明く目を驚かせし事し



南葛西の下民に至てその風俗あらくしかも人情ハ宜しく方言中
葛飾郡にくらべてハいかにも雑藝なども好ざるもの
なし。至てよろしく見ゆ。只男子ハ猪苫いさゝかもへつらはず
質朴にして剛勇なる事ハ東中葛飾の上にハ大に勝れりとかや
なり。是仍し専ら此邊ハ無頼もの多くちかく藪多し。垣ハ竹林
なり。箪の器ハ垣のつくりも柵を結びまはし生垣も盗むこと
まで栗柿などの木ハ柵ありて木下に植るの所多し。是を以てつくる
時ハ氣象大ひにこと也しまさ逞しく力持てる村の者も力たるしの
稽古所にて其勇を好む風俗にして東中葛飾の風俗ハ百姓
にも不似合なる技藝を習ひ力持なとする事ハ稀にして
婦女勇氣を好むものなし。ハる廉恥のやうに称する風也
むかし平氏の大軍関東武士の勇氣に服し此等の類ある
故にや、しかもむつかしき世にまでも風俗のかはらぬやうなるむかしの

こゝろ思ひ至りし事也。又村々に直に掃除し海邊へも遠く
土地のよろしからぬ故にや江戸に近けれども大よそ飲食ふ
奢りなるやふ解

下板橋驛

中山道筋江戸より初ての驛場にて信濃を初とし東海道
にはなしつゞく多く、その宿中の驛亭に諸國往來する旅人の往来
の人絶えず賑ハし。驛場にて倡家も多く作りなしたる驛亭
近邊ほとりの下に家並て大樹の欅樹有りの人々落葉ハいかにも
枝葉繁茂にして、いつのころよりか此木を縁切り榎と称して嫁入
聟入の人ハ忌嫌ひて此木の下をハ通らず遠く廻りて大ひなまハり
をするといふ世の中ひとへにこまかなる事ものもありや
木の枝を截てつとして持ち帰るもあるとそ
截りし人の悪木なりきりてそのな

ちのく経本もいつもくさ板なりけりや
偖人の日暮人すぶるをよりハ及風にも氏とのゆかりなる
なりとも縁なり老の木を伐捨なハ縁きる殿
と称しいよく悪嫌して無用世間しといふ僕跡して
そうぶを感して葢へ氏

岡村

龍光山智積寺ハ浄土宗にて本尊阿弥陀如来なり寒念仏よ
開基として山本卯下又右衛門ちるよ木下藤吉郎ゆかりの稲荷あり
稲氏ハ小社あり伝へるに中頃はまじめにより秀吉公当社下向の時
よ願主なり稲荷に云秀吉公当社へ下向ありし小田原
陣の後なりしハ天正十八年の事となれハ秀吉公稲荷とも
称てつきよ木下藤吉ハなりて凡下の時の名をつきしハなせ
稲荷の字なるべし

中基村

清水薬師と云名高き薬師仏なりけるハ薬王山大福寺とて禅
律寺の傍に碑石有りて縁起に聖徳太子の作仏と記せり
此所ハ峡下にて水の涌所なく此病を以て清水薬師と号せし
とやまた〳〵し

志村

古しへの志村の原と云伝へ此所を今まて呼と垣内村と云し
を今志村と改名せしハ志村の原の旧名なるべし此地古墳頗有
何人の葬墳せしといふ事も詳ならぬハ此地ハ峡にて南ハ深き
田にて塚の形跡り韻りぬ名ありし大方の士の築し古墳とらく
伝りぬ蓮村の前芝といふ一枚塚といふ小高き塚ありそこに
一夜のうちよ此塚を築きて墳井へ石を運ぶ入しよし伝て
落城せしと云伝へ事し
雑説の中に国にハ元亀天正の頃し能登ハ
遠からぬなる城主の姓名知るべし

赤羽根村

医王山東光寺新義真言宗本尊薬師仏御朱印拾石余
中興の事伝へもなし

同村

赤羽山八幡宮御朱印七石余吉田氏の道灌再建の社と云伝ふ
神宝獅子頭一ツ古き面二ツ宝剱と称し御刀一ふりハ何者
の奉もなし

稲付村

自得山静勝寺曹洞派の禅宗也此地太田道灌の古城跡にて
静勝ハ道灌の法名にて始基ありし館なりしその古跡にて道灌
の像もあり長二尺斗入道姿にて拂子を持し静勝の像や
手つから薬師を彫刻し池よりおこりたりし由云年天
道灌の杖ありしとて二タまたの竹なりしか何者とも知らねども伝へぬ
境内に三本の松の枝ありしが古木の松ありて道灌

千株の素と称ハみつから植ゑをしを是ハ詳ならハ
語すかし是風なる地によきくらまあり正徳五年の
銘をもほしてなれハ古梅を接ぎをしこのまや接
の質ならすそうく自然の洞の中にまつろくしし

同村

妙光山萬の浣新義真言宗ほ集印下拾石二年代の
由緒もなし古きとも旧地となん建武年中徳治
年中嘉暦年中の古墓あれへしし古しへの風俗
まや梵字と年号のミしるして何人の墓といふをハ
知らハ

同村

桜月山風土寺と云日蓮宗なり池上本門寺拾三ケ寺の内なり
寺説ハあしきにても庭の景の中に大樹の松と楓の木
ありまいろし大木にありけりやありけり不一木とらんく
志らし二木の風俗よく世に称ある呉木し僕法河揺り
して名木と称せる松樹楓木も殺く一ツ也しにかわ
呉木をうんる事初てあり辺鄙故に世人多く知らに
所よくおゝハ名木の名こゝるゝ執へし

十條村

妙見山西為寺と云寺院地の小院あり是より東方の
眺望よてよし凡景の如し

北
下戸田
荒川
茶店
氷川社
茶店
九池
芝地
三ツ井戸

常州筑波山
二十四里と云
是山ハ西南より
三里と云

此ある所の萱生芝之地の広大なるを計りくらへは新田ならん
せん凡二千余町もやらんか萱生と古人ハ称せしとなんハ
蕨ちのう数条ありして蕨草を以て此原の名とせし九地なく
称せられ昔時の川筋のよし也けれハて長四百余間横ハ三四十
間より七八十間の所もあり又爰ハ名高き古跡の
多し三ツ井戸といふハ古へより有る井にて深さ計り限り
なる数ある故の涌出る水無之候ゆへ今と
むかしに替らず名高き跡といへし尤地にも此三ツ井戸も
古人ぬしたしき尋ぬれとも何事もや尋ねしに
詳ならず広大の原ハ東方中央西方筋ハ絶へて
なき事しはかりもこゝろへとせし風景はことになき事なり
図画せるものなし
荒川の流れを戸田の渡しといふ是より蕨の宿へ

豊島村

此村に昔豊島左衛門清光といふ人住し地ありて一區をなしたる
ハ近郷たりし古人云ひ伝へに古しへ此郡の地頭を豊島左衛門尉
清光といひし人の旧館をも此地にて清光寺と称せしといへり
また左衛門ハ一人の息女ありしを足立郡の地頭足立右馬允何某
の妻に迎へる事など所いはくの事なるてや左衛門と右馬何
かしこ確執のことありて右馬允左衛門の女を離別せんとし
妻是を恨みし或夜ひそかに忍びおて荒川渡る淵に到り
て身を投けて溺れ死ぬ是を知らす其の時にの事情
を聞しけて父母是を知りて歎きして府中に帰る
くる左衛門何かかんと人を超て入り来り右馬の妻の事に是を
知りてこれいふをおんに怒るそれを如何にとなしてゆかさんを
渡る淵にありし淵の深き所を指さし様 一たん小川に

入て死けるよりて母の其溺死ありしを知りけり此書に
依るに腰元十二人あり此様の事をなせしを見聞て我のみ死せりと聞く此にて何の面目あ
らんとて十二人のものもみなおなじく身をなげて死にけるよし例の事程
して殉死せり左道の悪しきに依りて紀州高野山及び
那智権現に詣でて一念をこらし女の菩提を弔ふ権現の納受に
此さん山中にわたりて一ツの異木を得てこれを以て遠近
の事なきにあらんとも思ひしが其木を海に入ては称る
ものは権現の道徳によりて此大木武州豊島郡豊島の
今に流れよらんことを知るにふしぎやしかして此木
その無量寿木と称せる所に流れよりて光をはなつ
里人怪しくおもひて吟味せしに彼木の光ありし人く異木なり
事を知りて豊島郡のうちに送りて後も阿弥陀菩薩

当寺院の由緒は此縁をまねきて事の始終を語り仏師に
彫刻なさしめこれを作りしは行基も菩提の為のみならず故とて
六躰の阿弥陀如来を作りて彼人くの追善供養とし
事ゆゑに六阿弥陀と称して古説にしるす一番は
豊島村にあり二番は沼田村三番は西原村四番は田畑村五番は
下谷六番は亀井戸村にありしが後に所々にうつりて
貴賤をしるには殉死をし十二人の腰元は其生の地なりし故に
ゆかりの地へ遷せし阿弥陀仏なり
此補陀は此辺の大俗に碑に作りて此にうつし
太田道灌の居城を攻しとき此所にて此の行基菩薩
の事を云ひて補陀の時代ありにふ合せる説に若は豊島
左衛門といへる人いたく仏を信じて行基
豊島の時代を合せしにや解がたし

管中のうちなるは此度廻りせし村里の風土を考ふるに
荏原郡を始め土地よくて、あるひは土質よく瘠の
ところあれども総て風土は竝ちして廻りなりしところ五
穀のそだちはよく実の入りもすくなし畑作稼多くて
民家のなりはひもよろしからず人物も卑しく土地の
風土ひと口に言へばなんとも云ひかたき土地なり東海道
は廣玉川にそひし村里便利よく屋宅も建てはなはだ
よろしくも直家々と見えしは農居さへ見なし百姓の営
をおこなひ家となりひて他所の百姓よりも飯くらひの
奢あるにや
玉郡の平均荏原郡にかぎりなし当府中四方の土地も
同じく古く府を置しもむくなりしと見ゆるにし
此郡も玉川に添ひし村々は同じくなるべし甲府街道筋東海道

と違ひて淋しく茶店なども少なし百姓の住居なんども
しくみえて至りて粗末のくらしかさなりや総て人は貧しきやうに
みえ作りしと武蔵野の新田なんどは廣大なるゆゑ地面宛
過分に人数すくなく耕作小雑穀林などもちつき良桟(?)なる
開發の砂(?)地荒原なりしなれば人の来りて住むことなきゆゑに
貢も他所よりは高(?)く少なく備ものひしるすゆゑや
そのそれは百姓のなりはひしるく大概の民家古風にも
多し今より三三十年もたちてハ土地も肥へよき村々となるべし
埼玉郡を平均して右の二郡にくらべんときハ土地も瘠き
ところ此所のそだし家居をよくしめ人の物言ひもよく別して
日光御成道より荒川筋の村々ハ田畑殺(?)多くて土質
よき所の風土にして五穀の実のりも他所よりは中にても
下村神谷(?)村岩渕村なぞハよき中也筋のたぐひなりと

のもしは常陸行方村にありて大よそ此の風土記にて僕ら中出り
かきしは桂へまゐりて御花の宮蘆ありてえ作りしし
木綿なとも作あいさ節のさくさ生は庵ちと古地あり
荏原郡玉蔵乃古い蔵古窟古よ用ひかさし出づ蔵の
古い磯窟古に用てえし一出ふしてかりまて小楮あ
るけ大田の故あり下し下紀の事いふかへふは汁へふは
僕ら下紀の小智ふかそいえる処よ得ろわれうる絶し

武蔵國多摩郡之記上 古名旧地ヲ尋ルタメニ抜書ス此故ニ全カラス

武蔵國風土記

多磨郡 郷玉

三浦邑 六ヶ所 河 二流 川 三流 池 五 沼 九

宮社 十二ヶ所 寺 六ヶ寺 墳陵 四 基提 三ヶ所

東限草庵園西限金川南限卒田浦北限向岳

小川郷 柏江郷 爾布田 爾布田川

多磨川

小野神社

大麻止乃智天神

穴沢天神　虎柏神社
多麿大宮子 此下出合　大輪寺
和名類聚抄二
武蔵國多麿郡
小川 乎加波　川口 加波久知　小楊 乎也木　小野 乎乃
新田 爾布多　小島 乎之万　海田 安万多　石津 伊之都
狛江 古乃江　勢多
此二処ハ信濃ニ古事ありしハいまも其名を
うしなはずあきらかならん風土記ニ浦ありと古し
ても玉川のうちも先くハしくして入海なりし
よし

武蔵国多摩郡之記

喜多見村

永劫山華林院慶元寺と号する浄土宗の寺あり開山ハ
誉上人也当所ニ喜多見若狭守と云ひし人の建立にて御朱
印拾石寺の門前に若狭旧館の地とて少し小高き所に
古き堀跡あり此若狭といひし人ハ初ハ喜多見五郎左衛門と
称し永代堀の奉行としてありしかとも後立身して後ハ
常憲院様御側御用人となりて権勢ありしといふ事にて
罪せられて勢州桑名の城主松平隠岐守（越中守殿にあり）出羽守へ御
あつけ自殺せしとの事也元禄の中の事とかや此地
寺の会津殿ゟも古あきらかならず家臓せり本性ハ江戸
氏なりしに江戸崎に城ありけるしかるに会津の喜多見となるを

此氏と云し先祖ハ右京に仕へまつりせし下遠山より 子孫
なりし 遠山なるのちハ新田義貞の臣といふものとなりて
矢口の渡にて難にあひしへしなるを久しく文字を云ひし人も
此地に住居せしの事し若槻なるの又も又兄なりしも
以ひて 様なりしを若狭の家来筋にて 百姓のうちに
武家なりしを抱へ候へし家も ありしちんのいひさ
無林院の寺に古墳と見しき 岳ありて其下に松壱本
ありて其その木を掛し風を記す 五輪のうちに墳あれ
事を記しておりて 若き者の墳 とや 穿てみるべき 指し

同村

若菜山無量院請なりしと云て 真宗の寺院なり 御朱印
拾石弐斗外に五石の除地ある寺なり 別門明神の社あり 大同年
中の建立とぞ 御朱印ある(?)の 〻ふりして 此地にある 什物

株札ありし 作りとし此村に蛇除作札とて毒蛇(マムシ)を除
きし時にまじなひをする百姓ありて此辺の人々のいふにハ蛇尊
者へ入るにハ伊札とて唱て入れハ毒蛇にくはるゝことなし
何となく信しがたき説なれど此に乞て常に信ずる作札
なりとも なる事ありて蛇多き所ハ三里も五里もを受に
来りての事しなといひし

松泉村

雲松山泉龍寺といふ禅宗にて開山ハ名もなきと良弁僧正にて
千有余年の旧地にて古くハ此寺ハ無量宗なりしも常せし大
伽らん地なりしと云 孝謙天皇の御宇天下大に旱魃して
百民の苦も記すべからず此寺へ勅使ありて良弁僧正へ雨乞の
らせありしに良弁の法徳にて龍蛇あらはれて雨ふり天下
をうるほしたる時に涌出し泉なりとて其のあとに小池あり寺に

弁てをいつく龍神とありきしにて本堂に移し奉る聖
観音にて阿弥陀仏といふ三尊弁徳正州此地におゐて悪念あらんとて
うしろの墳あり古きしの松をうゑて御流寺と号し墳中
に経文読誦の声ありとて御流寺と称し来りしとなり
又かく解道ふうし俳せて三尊自らうへ重なりし 三光の松
といふあり数百年を経し松をつ松の入させ此所と
石谷氏の合地にて此先祖石谷十左衛門何がし君の御事
仕へて軍監にしてかの陣所にて事功を林氏の文書として
仕へく年代の記するは今宝永年中に甚せし門流に此を
より家にうつさむ後陣の日てらす宝物の具足并に太長刀
いらしてる十左衛門の身に帯したる具足の物し置きありしを
此ちに納め並せしるその石谷氏先祖の武功によりて
身に入りし長刀にして達磨大師の画像を川らへて今に

石谷家に秘蔵あるといひ伝ふ古き井並あり是も此寺の
陣の時其家に用ひし器なりとて石谷氏持ち来りて寄
納めしよしいひ伝ふ其らん宗の会にはセンスラリンと称する
よりて寄おかれて石谷氏此寺へありて掛物に出しもの
事し悪夷の宗門あるセンスラリンと言伝ありしも此寺に
ていくそもも称すると称して来る数度中にセンスラリン
の画像を下氏に譲りしとて先角図しを覚も何も
異しく何ものもなし

同

塚の形残りし古墳つつみへのうち古し人を葬る穴あるに
そて其の墳には家氏塚とてありきしとは土を堀しといふに
此墳何れの時か寺人数人にて取出せしに何もなく
知らぬ人も並にて数かの人をめしとし霊をていさの為に

もや窓ヶ稲なるを化せし岩屋の跡ありといへし

入間村

稲荷明神と号せる小社あり田地に伝ふし神宝世に稀
らしき石也別当ちを大巡山観音寺と称代々伝へ守
而して由緒も此郡にゆかしる何も知られぬはいたはしき
知らぬといふなかにもいかんとか説法談
しよまりたものなき古墳の風なにほの墳のうちある
へしと古しへ云ひしはまさの事し

下石原村

長谷山西光寺て号す中年中十字石金目地と号するの
その由緒を知るものなし すなくも中年中あらず浦はかしつくい
由緒未詳もあるよりて中年中下さましものあらに
廿四年ていは十七ちり八九年とせて も何故に残置きいふるも

早魃をさしとて奈良の都より
雨乞あらん人とて数百年あるこ
あることの僻地にての動使とい
解せじ御教の僻よいかなる
誤伝多し

紛しさまハ由緒なしハ先ニ若なりふ御法なるかなくいはじ
さてはちなることなる鐘のつくしふよりて近年て能くしれ
自鳴鐘と鐘し鐘と號せつくまハ此年享保の年号を
いふの事こゝやと里人に委しく尋けるハ此ちふむかしより
備へし鐘なりしかと破れくだけて用ゐぬ故に享保年
中に鐘を改めし事とて宗て其鐘銘なくとも今ハつきを
んなきなく人故ニ云ひ伝へしるきへもなし何としても当代
の年てハ臭なり自鳴鐘かしてきこの年なまハ炮術
ともふつんもなハ祈しなふへし大角の雑炮に鐘ハたゞ御用
つきら

車返村

八幡山本郷寺といふ浄土宗にて山号東下捨遠寺永正年中
良懐上人といひし僧開基にて尊氏の頃とハ云なる常律

といひし人の合戦にて刈比村にて率中にまし卒の墓は
ちなあり此所中縁なし

府中宿

まくては四の風土ハ沢辺を以て此国よりも能と
す中国に似て五穀のよろしく古しへ府を定しも
むべなりし六所明神ハ当社の一の宮にて旧跡世に知る所なり
景行天皇四十一年大己貴尊伊弉冊尊素戔嗚尊瓊々
杵尊天文貴命布留大神是を六所の明神と
称し康平年中源頼義公義家公奥州貞任宗任御
追伐の時当社へ御祈詣有て東国御静謐有りし事縁記
にみへたり頼朝公の御時も其ありまく家ふ畧をり
まくてこれの縁記をみるに何にもまをて作りしものに
似たくしくきに一本一所もなくても誰かの人のなきもの

故に古来の事ハ猪子まろとよ云加ふるのふしして伝しけし
しさゐあれとも祢宜役ある織田弥兵衛といふ人ハ常面して
法宝物或ハ古書古器の類ハ亡失と尋して正保二年ニ
当社焼亡し古しへよりの法神宝あらひはものまても宝物古書悉く
く焼失して一品ものこらすの事とし何事もそても宝物古書
のなきいひ伝よハ罪をかうむるよしつゝしみ申しいつちある
急度ニつとも社役ある神主祢宜社僧相ならて一品も
とりおさゝぬしてとく焼失よらつりハ見届しき
事にて此所法とりよくし神職林氏の類ハものいをね
まきし此所にて安堵ある職しやいよくし今の中ニ御ハ

慶長十一年

東照権現様御建立社領五百石よりのうし三百石ハ神主
様後継也令化とし社里弐百石ハ社僧之ある祢宜の類

おゝよ書付座ゆへしらべて神血の事れ及あれを出来候ことありけれ
ゆゑれを命せられのう座候ほどにて我等ら家ニ縁られる由
申しくとのゝもひ及ふれをさあらしいかゝる家のもしらず詮議ありと命
詔をあつらえ其よとこれよりて則ち之書出しとゆ事によりて
かりたる五月五日の後保ちの書いたさんとおせらるゝか
座なの中任し文二時前あまりせんとなん
又右社の古写ニ巳年ニ丙申出所にて中守殿
きつのゝ一社の後中ね五郎とをとせしをもつて移しと
いふ類あるもの成て見はよいて七人不思議の事いつし右社七所の
ありハ七人いつの上もふと様のとき後を居よにらん也

東照将軍様御建立社領五百石とすれとも三百石ハ神主
猿渡(?)統元合北として残り弐百石ハ社僧六ケ寺祢宜の類

十方庵遊歴雑記の説

六社宮中雑中説ある例年五月三日より六日まで三ヶ日祭礼あり
前日五日夜戌刻神輿出御 ○ 社内大国魂の御宮を凡三千余
歩を南へ年の年　台厂山宮之石花表也を是不破壊して神幸て
又り七ヶ所の二間四方の内程に一所の樹有り宮と人ふれ氏の生魚をと
明日十二十日の御供を○ ○ 宮之神の宮例年六ヶ所之神輿 行っ
定刻より八つ時の頃を ○ 又弥のまた参り供の氏人を体廃本
これにより是例の出御まて山本御旅所え来り旅所安置の宮を
一ヶ坊を安置

東照宮ハ　台厂山宮の以西へ社参して宮ハ大宮人有時
東照宮ハ　台厂山宮之西保寺の以国稲荷神社　嵯峨山本宮にて
多く世大将軍の南社大宮例年四月十五日神事を社役人同
平川流の事よりことにしてる宮参の事　十月と神事等次第ー十ヶ日

三月の祝儀に式に一切行事を済して宮参し会日之相図をて
一国行なと是ん　　　蕃合信木物語中白神輿とおのれき社人合
有六神の神事とまて御宮の中央に安置して蕃山社人へ配る
すべて弐の松の物構へ宮の事を申して横山保房の所存を上申すると
ようくて八月すし申まて此の供にこれを延して以来年延年
而宮目をそれと仏の年七十年お宮めの時宮の内より南をなりとて云て
日横山保房の所存を上られいと云を本国の社の故例に行を是定
其子の御神事毎より神職にすべて保房の子の宮の旅に通と仕
し刻限へ入たるを以て保房の一献さし保房より本も返盃し
それより保房にて横山一献を家の神人の社家へ下る
此時刻を由宮の下刻に至され横山保房より人の分を御神事
此人入るの時参りた然く御渡御を申す　陛奉　合巳十二代
延宝元年四十一年目五月五日　大之来八保房の神事をす(?)
の社一献の宮の御供の社八保房の中へ分け入ひとり国へ参す
ありて書出座なりて其式の宮の者ら人々御神事を行わる
中人を　命すなりて本儀にて是れ我先き事に縁となりし
例ならそのすむなりしてさなわるべからず日の事に社人えとも参る
社家より氏若衆ときこれまで行事之まで宮ノ中人
ず　今日まで五月五日の夜保房の書ハ下るを宮の神事を事ると
本保房の中にて凡二十時社務すせんとありん
又本社の本宮前に二番として出宮年に来る本の神と宮中(?)
まりのほと一下の御先の申見にまた申し合かて移しと
いふ御宮七の事ってもてやんて不思議の下りしより新七宮の
其外ハ七人より下りて横町の式次第八猪本年にみんな

[illegible]

殊ニして会地とハ
昔ハ高市ありて賑ハしく阿皇しはそハなしとさて境内を
免りて一読せしよめを證せしハ古木まて数百年経し
大樹叢生しあく生て古木ハ追々に枯くしつんて二丈も
有ハさるへき樹多し其うちを以て見れハ当国第一の旧地たる
いふつきう社御はいふハ星霜千六百年の地ほとく
八月朔日御神事此外正月六月七月古例の神事あり社の傍ら
古凡七八人なかりのゆるく如来の跡の請佐あり古く跡
しき古橋之古人皆以此御わするハ昔時ハ此辺総舎より奥将
小屋への古路として此地よりかしかまはりて来る寶と云
所称所として其の界川辨を経路のとく繁昌して社なき
しも中小島に此前宇喜多氏に係り退せられし後居あり
義経公両度追討の時宇喜多も為其のうきへお味やると申

此采女大にかなしミ三月西堂のうへにて頓んと云事東中からくふ
まかして此女ねきしふ俄ふなりけるのおりて事東ハ西堂宮の
難ひよ討死せし故采女ふつきしかく婦人の浅き智恵より
深ふ思ひかなしミつゐて終ふ自殺して死したり事東
是らなく悲しミて此よしをきく哀是なるゆゑ思ひて采女
菩提の為にして此阿弥陀如来を請さめ一宇の堂を建立ハ
是より此寺数百年を経もふりしうちるハうちすたれハ女の謂ひ
まて此所住来のもの人も絶へ荒はて僻地となりて所ハおきるそ
し来れるに此弥陀仏ハむかしの儘にそ露雨に仏くちりて
本堂の草中に埋るのをかくに信ありしに府中の善きをの
とも浅貞のおのありその比りや町の人々おかへりてまさしく
捨置しを往僧のうちなる阿弥陀信心の僧ありて今の堂を
建立して安置ありしに拝ひ人も来詣せるふゆうに世よいそ

まひしそのゆゑ堂の後なく肩に銘ありまての古仏故文字
定かならぬれとも所々に分明の文字ありて建長の二字据
明し膝にも三行の銘あり是ハちかにつきし所ゆゑや文字悉く
きえたれとやうやく藤原とかふ二字見ゆるのみし僕いろくして
石摺にせしに彫刻もよくして造ゆきよ濤付し銘ある文字より
つまかさしもとも来詣せる人風雅人ハ是非とも石摺させて退よ
此ハ摺深してあり是らハまことなる古物なれハいまもききなきこそのなく
是もかくる事の持仏なれハ人の為に深さりてかくなまで七ち
ハあらぬまるもなからぬ持ちたし其の持仏も又身もなく
あからくしこそのし

世の中に人のいく代の松原といへるゑんや見
とゝみし古寺のくちもかなんしいそくちしきや

東鑑治承六年八月十一日武蔵國六所明神ヘ葛西三郎

ヲ遣スしと云ふ事ありしならんとも是ハ神祇と云へし

府中宿

嚴光山安楽寺と云天台宗の寺あり御朱印拾石人皇九十
一代永仁年中当海上人の開基なり寺宝物例の燒失し

同所

本光山妙光院と云禅家の寺あり御朱印拾石
あり行基菩薩の作なる地蔵尊あり此寺ハ府中にての
殊勝の寺院にて宝物数多く有中にも行基の製せし七條の袈
裟あり

東照権現様より拝領ありのよし云まし　権現様より御羽織を
拝領せしを七條の袈裟とし当寺第一の宝物とせしにて
先年回禄によりて燒失せしとなり

大猷院様御ゑらせ有し画を写しかけものにいたせし丈長の掛地
一幅あり岸川なとの古画あるにて是をまなひしならんとあり

事し右ハ伊勢物語の磬石つゝありし是ハ和尚其の昔いろいろに雅楷
なりけりしてえりしに其音のさゝ々舎にして讃揚の其のなりし
磬石を呈し基ちいは不意成りし御名なりしといひしよし付属
殺害なりけり何事も何不足人作阿大師の作と面々のつかぬ
仏なりけれはさうに罪やう
伝僧の物語りさハ清水てらの内守りこゝろ岳島寺の内建立
開山慈済僧正としるのみし

同所

興福寺の奥書に書所なりといふても其の律院ありし此寺下拾石の
余香ある阿弥陀の大仏にて其までのなし四乗ところも中に
引絶して其ての小院なりしを此地に依田伊織と称せし神
左仏左の寺とせし時僧の人ゆりて准三后公の寄附と称し
支まりして法僧まてを門人として嗣しか寓僧の身と成りて
ける寺を再興し殺害の田畑を寄附せしによりて此のなをさま
なり僧と成りしてかくして云さて此ちる伊織かの夫と殺害あり
仏左神を寄合して成しとの事て自ら寺をさる国後し庵寄
なりけり目を就に至るんての寄し何といふ事なりやと尋ねしに
表款ありしきをハ伊勢も知りに本使者の大般若にかゝ寄せし
寺との伝へし其ね仏事ハさこ所への流ありきたるこの寺をハ
何事やら今もて仏事を起し寺なりしはまりても思へハそ
明るみのこと取をして感するなる巻りそて面々かりし伊織日
今こしの里にありし時准三后公なりしか此歌をあり見とめる
其田僧のなされしと云掛地あり其の寺に

神寄りもてる様にてよみ侍る

身のうへをんのうちに明らめてみる原の神そうやこよ

日暮須士

何某の物語せし畧しぬ

同下

新つゝみ三ヶ安楽寺称名寺古しへよりの寺にて俵藤太秀郷
旧宅の地といひ伝へ境内に秀郷稲荷と称する小社あり
むかしくはしく伝ハらねども武蔵坊弁慶も此所に来りしとぞ
住居せしよしにて弁慶井と称へ古井あり弁慶橋といふも
ありて左もありけんと見えし所なし武蔵坊といひしは住て此所
へ門つきしや弁慶は此山住せしと云事未だ得ず後備の物語もハ
弁慶は比叡山於て大般若を書写し奉納せし縁文七八十年
以前まてハ南畑の什物となりしに谷保村の安楽寺へ納めしに
夫よりして見えされハ谷保村なる寺より宝物となりし物とハ見えぬ
左もありけにや詳ならず是より後相軍前氏公の建立開
山ハ心月禅師にて此寺中十二石此辺りその大寺にて寺内院

前氏公の法名し本堂の額ハ其の程赤城へ参りて筆勢能く
字を大文字ありて心ゆくまで寺の井ハ無そも名ある碑出
よはらぬ山門の額ハ能つゝみとぞありて当山和尚の筆にて
見も尚らぬやうに見へ侍りし

弁慶ハ世に名ある人ゆゑ説ありといふも證をまたき古書になし
此寺大つらの甚しかも日本史並ものぞき事と僕未詳

同所

法源山称名寺ハ阿弥陀仏恵心僧都の作仏と云此寺を
抜釣派の称名寺とて此地方一の古寺ち説に比もとハその頃
地より此寺本拾三石きりとて外にたすきちあきち数多僧く
のこりしさらぞしといひ伝へよハ当源王頼基公東叙王ね門
進代の頃しちる法止霜ありしとの事し

同所

明神の西南にあたる所に屋形跡ありかしこはるかにうつくしきしに
ありし人の居所にして今は其跡畑なり
大平記にあるもしろ分倍河原といふは今田畑となりて
府中の枝村なりむかしは玉川府中明神の後へ流れしとの
事に分倍の文字を今は分梅と書にて光明院といふ小流
あり其辺りもあれたる所なれば世俗の名にし此所の古人に
尋ねしに古銭場といふ所も知れぬ古しへの往来筋といふ
事のことを伝へいひしともあるべし
分梅河原にては新田義貞鎌倉勢と大いに戦ひし所
にて其の辺に古人首塚胴塚といふあり合戦討死せし人の
塚なるべし享徳三年上杉朝興玉川を前にあて陣し
小條氏康向か岳の小沢の原に出し両軍府中辺にて
合戦し上杉方敗軍をしに軍勢に記し此所の里人に

其跡を尋しに委しく知れる人なしゆしてや夫より以前
のことハ知りぬところもなくなり
向ヶ岡といふ所を玉川より南にあるものといふて実説は分に
多摩郡のうちにて玉川の南にあり古よりして古く小山田の
関と称せし関の古跡と云ふ小山田の荘といふも遠からぬ也て
其ぬけ出しも新にして未定成るべし

玉川にさらす手つくりさらさらに
昔の人の恋しきやなそ　よみ人しらず

此哥拾遺集に載る手つくりとハ調布と書し布のことのよし
むかしハその布田村を布多とも記して此里より布を織出し
玉川の水にさらし他国へハ出せしとかやみちのくの布まて枝の
細布の類なりし。当所にては麻布を織ていし木綿なりしも
古しへの事にて河内木綿を織りわしより布を衣とせる

人のあさまりていろしろ布を裂して華をさし畢と
絶へし事にや

中河原村

民の傍に正中の年号ある古墳くたり年号寛政六年
のむかしより凡四百七十年になる古きあらはめづらし
何人の墓といふを知る人なし予雖いふ予も元亨年中
の古墓あり僻地なれば古き墓もうせずして民の傍
小ありし此墓石何にもよらず石や当世絶えてなきさる
素地の地にあるの質よき石にて数百年の後も彫刻せし文字
のきへうせぬ石も古石もいちんなの

米倉村

石に正殺若狭守勤むといふ古墓は源宗津戸勘解由左衛
門尉菅原親継延元五年七月十日子討死其後孫民継して在

今年まで四百五年になる古人の云津戸三郎為守の子孫と
申伝へしといへり

下谷保村

天満宮の社あり此所に菅原道真の古筆有へ流されたまふ
時此公を追慕ましましも終り給ひしへあやしきまひつけに
此所へ此三男道武を中せし後あまきまひて菩提の為つき
くにみづから此父の像と其身の像とを刻して是をひとしと思へ
ほりたる神とし社とて社領拾石を牛の庄茅地にして此三郎
判官由る後代にて此神像は抱えは此所に新古詳なるに

上谷保村

梅光山松寿西院安楽寺といふて天満宮の別当寺なり 本尊ハ
津戸三郎菅原為守血文の阿弥陀如来法然上人の作仏
にして阿弥陀仏の像中に血文の入てありと云伝ふ 仏は
為守ハ武君より六代目の子孫にて世に知られたる人にて宝物に
後宇多院の勅額村上天皇より御額あり 相大武蔵国
無比亀井六郎伊勢三郎右四人手写せし大般若経巻之為
に甲冑薬師と称する伝教大師の作仏にて来りしを御
の類ありしといふ 何れも世に称しき什物といふへし 然し
神なめくに安置のち荒れて天満宮の社に移して渡し本の
縁文 甲冑薬師ハ本尊なる弥太寺村の弥大寺へ移し置く
いふて一所にしたれハ古へ備ハ古の谷保の宝物を爰に有し
生のこし本の宝物いふまても古の宝物なりは世に称しといふへし

同村

古人古墳地といひし地にして古物を見出しことあまたあれ
ば伝に平新王将門をころせし平太貞盛の古戦場の跡とも
いひ又菅原道武君旧館の地なりといひ何れの是なるや
詳ならず

同村

道武君薨せし後板本にて天満宮の御社へ勧請下向
の当時御旅館の跡を今御旅坂といふ是も右之の
拘証なりき

日本政府図書
内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan